

隅田川詞章

登場人物

シテ・梅若丸の母
ワキ・隅田川の渡守

子方・梅若丸の霊
ワキ連・旅商人

ワキ これは東国隅田川の渡守にて候。さてもこの渡りは武蔵下総両国の境に落つる川にて候がこの間の雨に水気に見えて候。大事の渡りにて候程に旅人の一人二人にては渡し申すまじく候。人々を相待ち渡さばやと存じ候。

武蔵||現在の東京都、埼玉・神奈川の一部
下総||現在の千葉県北
部

ワキ連 末も東（あずま）の旅衣。末も東の旅衣。日も遙々の心かな。これは東国方の商人にて候。我この間は都に候ひて。色々商ひ事終はり。ただ今本国にまかり下り候。

雲霞あと遠山に越えなして。あと遠山に越えなして。幾関々の道すから。国々過ぎて行く程に。ここぞ名に負ふ隅田川。渡りに早く着きにけり。渡りに早く着きにけり。

急ぎ候程に。隅田川の渡りに着きて候。急ぎ舟に乘らうづるにて候。いかに船頭殿舟に乘らうづるにて候。

ワキ なかなかの事舟に召され候へ。またあとより人の多く来たり候は何事にて候ぞ。

ワキ連 あれば昨日の泊まりにありし女物狂にて候。

ワキ さあらばかれを待ち舟に乘せうづるにて候、しばらく御待ち候へ。

ワキ連 心得申し候。

シテ 人の親の心は闇にあらねども。子を思ふ道に迷ふとは。今こそ思ひ白雪の。道行ぶりに誘はれて。行方いづくと定むらん。あら定めなの頼みやな。

聞くやいかに 上の空なる 風だにも。

同音 松に音する 習いあり。

シテ 真葛（まくず）が原の露の世に。

同音 身を恨みてや明け暮れん。

シテ これは都北白川に。年経て住める女なるが。思はざる外に思い子を。人商人に誘はれて。行方を問へば逢坂の。関の東（ひがし）の国遠き。東（あずま）とかやに下りぬると。聞くより心乱れつつ。そなたとばかり思ひ子の。跡を尋ねて迷ふなり。

同音

千里（ちさと）を行くも親心子を忘れぬと聞くものを。もとよりも契り仮なる一つ世の。契り仮なる一つ世の。そのうちをだに添ひもせで。ここやかしこに親と子の。四鳥（しちょう）の別れこれなれや。尋ぬる心の果てやらん。武蔵の国と下総の中にある。隅田川にも着きにけり。隅田川にも着きにけり。

シテ なうなう船頭殿舟に乗り候ふべし。

ワキ 汝は狂女ごさめれ。いづくよりいづ方へ下る人ぞ。

シテ これは都より人を訪ねて東へ下り候

ワキ たとひ都の人なりとも。面白う狂へ狂はずは。この舟には乗せまじいにて候。

シテ うたてやな隅田川の渡守にてましますば。日も暮るる。舟に乗れとこそ仰せあるべきに。かたの如くも都の者を。舟に乗るなと承るは。隅

人の親の心は闇にあらねども 子を思ふ道にまどひぬるかな||後撰集藤原兼輔の歌
白雪の道行ぶり||春來れば雁帰るなり白雲の道行ぶりにことやつてまし||古今集凡河内躬恒||
聞くやいかに上の空なるかぜだにも 松に音する習ありとは||新古今集宮内卿の歌
真葛が原の露の世に||わが恋は松を時雨の染めかねて 真葛が原に風騒ぐなり||新古今集慈円僧正
千里を行くも||親千里行不忘子||白氏文集
四鳥の別れ||中国桓山の鳥が四羽の子を産んだがこれらが成長して四海に飛び立って行く時、母鳥が悲しんでないて送ったという「孔

田川の渡守とも。覚えぬ事な宣ひそ。

ワキ 狂女なれども都の人とて名にし負ひたる優しさよ。

シテ 名にし負ひたる都の者と承れば。こなたは耳に当たるものを。かの業

平もこの渡りにて。

名にし負はばいざ言問はん都鳥 我が思ふ人はありやなしやと

なう舟人。

ワキ 何事ぞ。

シテ あの沖に白き鳥は京にては見ぬ鳥なり。あれをば何という鳥にて候ぞ。

ワキ あれこそ沖の鷗候よ。

シテ よし沖にては鷗ともいへ千鳥ともいへ。この隅田川の白き鳥をば。な

ど都鳥とは答へ給はぬ。

ワキ げにげに誤り申したり。名所には住めども心なくて。都鳥とは答へ申

さで。

シテ 沖の鷗と夕浪の。昔に返る業平も。

ワキ ありやなしやと言問ひしも都に人を思ひ妻。

シテ 妾も東に思ひ子の。行方を問ふは同じ心の。

ワキ 妻を忍び。

シテ 子を尋ぬるも。

ワキ 思いは同じ。

シテ 恋路なれば。

同音 我もまたいざ言問はん都鳥。いざ言問はん都鳥。我が思ひ子は東路に。

ありやなしやと。問へども問へども。答へぬはうたて都鳥。鄙の鳥と

はいひてまし。げにや舟競ふ。堀江の川の水際に。来居つつ啼くは都鳥。

それは難波江これはまた。隅田川の東まで。思へば限りなく。遠くも

来ぬるものかな。さりとは渡守。舟こそりて狭くとも。乗せさせ給

へ私も理。さりとは乗せ給へや。

ワキ かかる優しき狂女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ。大事の渡りにて

ある間。かまひて船中にて物に狂ひ候な。最前の人舟に召され候へ。

ワキ連 心得申し候。いかに船頭殿に申すべき事の候。

ワキ 何事にて候ぞ。

ワキ連 向かひに当たつて念仏の音の間こえ候ふは何事にて候ふぞ。

ワキ あれば人の弔日に大念仏を申され候。あの念仏について哀れなる物語

の候をこの舟の向かひへ着こうずる間に語つて聞かせ申し候べし。

さらば御物語候へ。

さても去年三月十五日。や。しかも今日にて候ひしよ。都の人とて年

十歳ばかりなる幼き者を。人商人奥へ連れて下り候が。この人習はぬ

旅の疲れにや。路次より以つての外に違例(いれい)し。この河岸に

ひれ伏し候ひしを。なうなんぼう世には不得心なる者の候ひけるぞ。

今を限りと見えたる幼き人をば捨ておき。商人は奥へ下つて候。さり

ともさりともと思ひしかども。かの人ただ弱りに弱り既に末期に及び

候程に。余りに痛はしく存じ古郷を尋ねて候へば。今は何をかつつみ

参らせ候べき。我は都北白川に吉田の何某と申しし人のただ一子にて

候。我が名は梅若丸。生年十二歳になり候。父にはおくれ母一人に添

伊勢物語九段「東下り」

に「限りなく遠くも来

にけるかなとわびあへ

るに渡守はや船に乗れ

日も暮れぬ」とある。

また同段に「名にしお

はばいざこととはん都

鳥 わが思ふ人はあり

やなしやと」

「舟競(ふなぎほ) ふ堀

江の川の水際に 来居

つつ鳴くは都鳥かも」

(万葉集大伴家持)

違例⇨常の状態でない

こと、病をえているこ

と

ひ参らせ候を。人商人これまで連れて下り候。我空しくなりて候はば。この路次の土中に築きこめて給はり候へ。それをいかにと申すに。誠は都の人の足手影までも懐かしう候程にかように申し候。ただ返す返すも母上こそ。何よりもって恋しく候へとて。弱りたる息の下にて。念佛四五遍唱へつひに終はつて候。さる程に遺言に任せ墓所を構へ。標に柳を植ゑて候。今月今日が正命日に相当たりて候程に。所の人寄り集まり大念仏を申され候。この船中にも少々都の人もござ候ござめれ。あはれ大念仏を御申しあつて御弔ひあれかし。

や。長物語に舟が着きて候。急いで御上がり候へ。ただ今の御物語に落涙仕りて候。末は急ぎにて候へども。我等も念仏の人数に参り候べし。

ワキ 　こなたより時節を申さうずるにて候。

ワキ連 　心得申し候。

ワキ 　いかに狂女。舟が着きて候とうとう上がり候へ。

シテ 　なうなう船頭殿。今の御物語はいつの事にて候ぞ。

ワキ 　去年三月十五日しかも今日に当たりて候。

シテ 　さていづくの者と申し候ひしぞ。

ワキ 　都北白川。

シテ 　父の苗字は。

ワキ 　吉田の何某。

シテ 　稚児の年は。

ワキ 　十二歳。

シテ 　その名は。

ワキ 　梅若丸。

シテ 　さてその後は親とても尋ねず。

ワキ 　親類とても尋ね来ず。

シテ 　なうまして母とても尋ねぬなう。

ワキ 　いや思いも寄らぬ事。

シテ 　なう親類とても親とても。尋ねぬこそ理なれ。その幼きものこそこの

物狂が尋ぬる子にて候へ。これは夢かやあら悲しや。

シテ 　言語道断。さてはその人の母にて御入り候か。今は嘆てもかひあるまじ。

シテ 　かの人の墓所を見せ候べしこなたへ渡り候へ。

シテ 　なうなうこれこそかの人の墓所にて候へ、よくよく御弔い候へ。

シテ 　今まではさりとも逢はんを頼みにこそ。遙々これまで尋ね下りたるに。

シテ 　今はこの世に亡き跡の。標ばかりを見る事よ。さても無慙や死の縁とて。

シテ 　生所を去つて東（あずま）の果ての。道のほとりの土となつて。春の

草のみ生ひ茂りたる。この下にこそあるらめ。さりとは人々。

シテ 　この土を覆（かえ）して今一度。この世の姿を。母に見せさせ給へや。

シテ 　残りてもかひ有るべきは空しくて。かひ有るべきは空しくて。有るは

シテ 　かひ無き帚木（はわきぎ）の。見えつ隠れつ面影の。定め無き世の習。

シテ 　人間愁ひの花盛。無常の嵐音添へ。生死長夜（しじょうじょうや）の

シテ 　月の影。不定の雲覆（おお）へり。げに目の前の浮世かな。げに目の

シテ 　前の浮世かな。

ワキ 　既に月出で川風も。はや更け過ぐる夜念仏の。時節なればと面々に。

生死長夜 〓 生死の迷い

を長い夜に例えた

不定の雲 〓 老少不定を

雲に例えた

鉦鼓（しょうご）を鳴らし勸むれば。

鉦鼓Ⅱ念仏用の小さな

母は涙にかきくれて。念仏のさへ申しもせで。ただひれ伏して泣き居たり。

鐘Ⅱ鳧鐘

うたてや人々多くとも。母の弔い給はんをこそ。亡者も喜び給ふべけれど。鉦鼓を母に参らすれば。

我が子の為と聞けばげに。此の身も鳧鐘（ふしょう）を頸に掛け。

嘆きを止め声澄むや。

月の夜念仏諸共に。

心は西へと。

一道に。

シ・ワ 南無や西方極楽世界。三十六万億。同号同名阿弥陀仏。

シテ 南無阿弥

陀仏。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

南無阿弥陀仏。

シテ 隅田川原の。波風も声たて添へて。

同音 南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

シテ 名にしおはば。都鳥も音添へて。

同・子 南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

シテ なうなう今の稚声はいづくの程にて候ぞ。

ワキ 正しくこの塚のほとりと覚えて候。

シテ さればこそ疑もなき我が子の声なるぞや。今一声こそ聞かまほしけれ。

南無阿弥陀仏。

子方 南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

同音 声のうちより。幻に見えければ。

シテ あれは我が子か。

同音 母にてましますかと。互に手に手を取り交せば又。消え消えと失せければ。

見えつ隠れつする程に。東雲の空もほのぼのと。面影も幻も。

見えつ隠れつする程に。東雲の空もほのぼのと。明け行けば跡絶えて。

我が子と見えしは塚の上の。草茫茫として唯。標ばかりの浅茅が原と

なるこそ哀なりけれ。なるこそ哀なりけれ。

なお当日の演出により詞章が異なる場合があります。

※同音とは地謡のこと。地謡は多くは八人で構成され、シテの演技を助けたり、ナレーシヨンの役割を負う。

三十六万億Ⅱ一声の念仏で三十六万億遍念仏を唱えるのと同じ功德を生ぜしめるという経文から